資料紹介

廖文毅主編『前鋒』（1946 ～ 1948 年）の誌面構成

張　彩薇

はじめに
第１節　『前鋒』の誌面構成と執筆者
第２節　『前鋒』の支持基盤
おわりに

（要約）
本資料紹介では、2･28 事件前後の台湾人の言論を示す媒体として廖文毅主編『前鋒』（1946 ～ 1948 年）の誌面構成を明らかにした。本誌は政論誌としての性格が強く、アメリカについては民主主義のモデル、産業の発達した国として賞賛するばかりではなく人種差別にも着目、また中華民国憲法制定過程における中国民主同盟の役割にも注目しており、全体として東西冷戦のはざまで台湾の高度な自治を実現しようとする傾向が見られる。

はじめに

日本敗戦直後から 2・28 事件までの間に、台湾人が主体となって刊行した雑誌が隆盛期を迎えた[1]。その 1 つに『前鋒』がある。『前鋒』光復記念号（以下、光復記念号）は、1945 年 10 月 25 日に「台湾留学国内〔＝中国大陸〕学友会」（〔　〕内筆者注）により出版された。光復記念号の巻頭には、廖文毅「刊行の辞―我が台湾同胞に告げる」が配置された。

光復記念号が出版されておよそ 1 年後の 1946 年 10 月 12 日に、『前鋒』第 1 号が創刊された。表題は同じであるものの、「第 1 号」と銘打っていることは新たな雑誌の創刊と位置づけられていたことを示す。編集体制にも変化が認められる。出版社は「前鋒雑誌社」になり、刊行の頻度は週刊となった。廖文毅がこの「前鋒雑誌社」の社長と主編・主筆を同時に務めると記された[2]。廖が一貫してキーパーソンであったことは確かであるが、本資料紹介では巻号表示が継承されていない点に着目して光復記念号を第 1 期『前鋒』、そして 1946 年から 48 年までを第 2 期『前鋒』と呼ぶこととする。なお、1949 年以降、廖が組織した「台湾再解放連盟」の日本支部が『前鋒』を再刊するが、本資料紹介ではとりあげない。

1998 年に「光復記念号」の復刻版が出版された際、張炎憲は次のように紹介している。『前鋒』が発行された時期は 2・28 事件前後であり、戦後台湾人が追い求めた解放の理想が語られると同時に、絶望の淵に追いやられた過程とそれに対する人びとの苦痛が読み取れる[3]。本資料紹介でも、こうした張炎憲の見解を踏襲する。ただし、張は第 1 期『前鋒』を中心に紹介しており、第 2 期『前鋒』は 2・28 事件特集号以外には言及していない。他に戦後初期の台湾人による文芸雑誌や政論雑誌にかかわる研究としては黄英哲や何義麟の研究が着目されるが、『前鋒』についてほとんど論じていない[4]。

第 2 期『前鋒』に言及した研究として、楊欽堯が 2・28 事件直前に刊行された『前鋒』第 11

～ 15 号を通して廖文毅の「自治」思想を分析している他、陳正茂が 2・28 事件以降に上海と香港で刊行された『前鋒』第 16、18 号を用いて廖の「独立」の思想を検討した[5]。個々の記事の分析に先立って、誌面構成や執筆者にかかわる全体的な傾向を確認する必要があるという考えから、本稿では現時点で所在を確認できていたものについて資料紹介を行いたい。

第 1 節　『前鋒』の誌面構成と執筆者

第 1 期『前鋒』の刊行主体である「台湾留学国内学友会」は、刊行後ほどなく台湾省行政長官公署に解散を命じられた。理由は「非合法であり、しかも存在する必要性がない」というものだった。解散を命令した時期は不明だが、1946 年 1 月 24 日以前であることは確かである[6]。これにより第 1 期『前鋒』は創刊号こそ確認できるものの、第 2 号は確認できない。46 年 10 月廖文毅は前鋒雑誌社を立ち上げ、第 2 期『前鋒』を創刊した（以下、特筆しない限り『前鋒』と記す場合は全て第 2 期を指す）。廖文毅は 1945 年 11 月以来、行政長官公署鉱工処と公用事業管理処に勤務していたが、46 年 8 月に職務を辞任し、政治運動に身を投じることになった。その理由について、「不偏不党のエンジニアで、一凡人の私ごときはなぜ「仙人の行列」に入ろうとしたのか。これまでも言ってきた通り、「政治に打開策がなければ、何も打開できない」と考えたからである」と説明している[7]。『前鋒』の表紙の言葉「民主的前鋒・自治的拍車・青年的指針〔民主の前鋒・自治への拍車・青年の指針〕」は、その刊行が広い意味での廖の政治活動の一環であったことを物語る。

『前鋒』は第 18 号（1947 年 4 月 20 日）まで刊行されていることを確認できる。ただし、現時点で第 3、6 ～ 10 号の所在は不明である[8]。第 15 号（1947 年 2 月 21 日）までは台北で発行されたが、2・28 事件以降は廖の亡命先である上海あるいは香港で出版された。

表 1 は目次一覧を示したものである。号数、発行年月日、発行地、頁数、定価の下に、広告掲載企業・組織を 1 頁の誌面のなかで占める大きさの割合とともに記した。例えば「台北市煤気 1/2」は 1 頁の半分の誌面で台北市煤気の広告が出されたことを示す。

各号の冒頭には「社論」が置かれている。行政長官公署の決定によって 1946 年 10 月 25 日以降は定期刊行物の日本語欄が禁止されたにもかかわらず、少なくとも第 5 号（1946 年 11 月 9 日）まで「社論」に中文欄と日本語欄が並存していたことが注目される。1947 年以降も、日本語で投稿した文章が数篇掲載されている。読者投稿募集に関する記事にも、「日文、中文問わず」と明記されており、日本の植民地教育を受けた台湾人知識人を主な執筆者及び読者として想定していることが伺える[9]。

「社論」の他は必ずしもジャンルが明記されていない論説・随筆風の文章が多いが、第 11 号以降には「論文」「文芸」というジャンルの明記された文章も登場する。また、時評的なコラムとして「宇宙光」「小前鋒」がある。この他に前峰雑誌社の主催した座談会がある。以下、⑴社論、⑵論文・論説・随筆、⑶時評、⑷創作にわけて、それぞれの傾向を紹介する。（No.）は表 1 の No. を示す。引用に際しては原文が中文の記事も日本語訳して示す。

1. 社論

1946 年 10 月刊行の『前鋒』第 1 号冒頭の社論では「植民地として地獄の如き苦しみ」から「解放」された後も継続する「植民地」の仕組みに対する戸惑いを表明しつつ、「我等は自由、平等、民主並びに自治を要求する」と訴えている。また「「台湾人に生れた我々」は現在に於いて即ち立派な中国人であるのだ」（No.1）と呼びかけてもいる。

第 2 ～ 5 号の社論では大陸における制憲国民大会の開催準備と台湾省代表の選挙に注目している。1946 年 11 月中旬から 12 月下旬にかけて、中華民国憲法制定をめぐる制憲国民大会が南京で開催され、10 月 30 日にはそれに出席する「台湾省代表」の選挙が行われていた。例えば、第 2 号では、「選挙に人が干渉すれば之れを「官選」と言ひ、取り締まる人無く賄賂で当選すれば之を「銀選」と謂ふ」と述べ（No.9）、第 5 号「社論　官党の大勝利を祝す！」では選挙の過程と結果に対する批判が皮肉な筆致で記されている（No.25）。

1947 年元旦刊行の第 11 号から 2･28 事件直前の第 15 号までの号も憲法にかかわる内容が多い。1947 年元旦に中華民国憲法が公布されたためである。第 11 号では食糧統制や専売制度、苛税、警察と人民との衝突などの問題を取り上げながら、実施される予定の中国憲政や対日講和会議、そして台湾島内の選挙と経済政策に着目している（No.33）。また、第 12 号では、日本統治期に「皇民化」に応じた「先覚者」と日本に対して非協力的な「後覚者」が戦後になると立場が逆転するという時代の変化について語り、「憲法実施」という時代において「先覚者」になるよう説いた（No.43）。第 13 号においても、新憲法が「聯省自治〔各省が独自の省憲法を制定して高度な自治を実施する国家制度〕」を認めなかったことへの批判を述べながら、それでも自らの努力で自治を実現する重要性を呼びかけた（No.53）。

2・28 事件以降に刊行された第 16 号、17 号の社論（No.84, 96）は事件を中心とする内容となる。1948 年に香港で発行された第 18 号の社論では中国の内戦を世界的な冷戦体制の前線とみなしたうえで、「自立しなければ、我々は永遠に「植民〔地〕」と見なされる。自立以外に、台湾には解放の道はない」と訴えている（No.116）。

2. 論文・論説・随筆

以上の社論からわかるように、『前鋒』は総じて政論雑誌としての性格が強い。しかし、自然科学及び工業にかかわる論文・論説も収録されている。これには廖文毅の経歴が関わっていると考えられる。廖は戦前、南京金陵大学からアメリカに留学して化学工学の博士号を取得し、1936 ～ 39 年までに大陸の浙江大学で化学工学を教えた経験を持つからである。

具体的には廖自身が書いた「台湾鉄鋼業の将来」（No.12）、「台湾鉱工政策改革の提案」（No.86）の他、黄瑞卿「民族工業のための呼びかけ」（No.3）、邱賛生著 / 黄瑞卿訳「燐酸塩皮膜防銹法ニ就イテ」（No.19）が掲載されている。黄瑞卿は公用事業管理処における廖の同僚である。邱賛生は東京高等工業学校を卒業し、日本防銹株式会社を勤めていた人物であり、いかに鉄鋼をサビ（銹・錆）から守るかという趣旨の原稿を寄稿している。

廖文毅の兄である廖文奎の文章も、「心理改造論」（No.2）、「与野党選挙戦」（No.26）「台湾に

於ける帝国主義と民族主義との闘争」（No.73）、「凄惨な二・二八のための呼びかけ」（No.85）が掲載されている。このうち、No.73 は英語で『The China Weekly Review』1947 年 1 月 18 日号に掲載されたものが、廖兄弟の甥の廖史豪によって日本語に訳されたものである。廖文奎は、国民党政権の対応を「中国帝国主義」と評し、その対応が改められないならば台湾人は「中国民族主義」ではなく「台湾民族主義」の担い手へと変わるだろうと論じた[10]。

台湾の経済問題については、のちにペンネーム「邱永漢」で知られることになる邱炳南が、3 篇の論説を投稿している（No.44, 55, 62）。ここで邱は戦前東京帝国大学経済学部で学んだ経験を生かして、日本に依存させられていた経済を再編した上、外省人から経済の主導権を取り戻すためには政治的自治が必要と論じた。

アメリカに関わる論説・随筆も多い。例えば、〔廖〕文毅「アメリカの景色」（No.8~83）はアメリカの産業の興隆を留学時の経験に即して描いた随筆である。張生「アメリカ KKK 党」（No. 14, 21）は白人至上主義者による人種差別について論じている。「張生」が誰のペンネームであるかは不明だが、コロンビア大学図書館にて執筆されたという付記があるので留学生の可能性がある。「議員選の中　アメリカ国会を紹介」（No.28）、「第二次大戦中アメリカの軍備」（No.57, 66, 77）という時評では国民全体に責任を持つ国会のあり方や、軍隊への文民統制などアメリカの民主主義を肯定的に紹介している。一方、「ヘンリー・A・ウォレスの運動」では、人種差別や経済格差の解決と「米ソ共存」を訴えるアメリカ「第三勢力」に着目しながら、民主党と共和党が手を結んで「第三勢力」を異端として排除することを批判している（No.123）。

中国大陸の知識人が書いたものとして、洪深「米国憲法は如何にして反対党の存在を保証しているか」（No.10）がある。洪の論説は欧米留学経験を持つ中国の民主派知識人が中心となって発行した雑誌『周報』から転載されたものとみられる[11]。洪はハーバード大学留学経験を持つ知識人であった。国民党からも共産党からも距離を取る中国の「第三勢力」、中国民主同盟の代表的な論客・羅隆基の「憲法草案の批評」（No.34）も掲載されている。

このほか、1935 年に『台湾新民報』に連載小説を寄せた作家・阿 Q 之弟（本名徐坤泉）と、そのイラストを担当していた漫画家・鶏籠生（本名陳炳煌）の随筆も収録されている。鶏籠生はアメリカに留学した経験があり、二人とも廖文毅の友人だったと考えられる。阿 Q 之弟「狂物春色」は鶏籠生と台湾各地を旅行したときに見聞した景色や社会現象を記録したものである（No.50, 58, 68）。鶏籠生「自由の港」と「上海へ」は一見すると旅行記であるが、それぞれ香港と上海租界内外における西洋列強の略奪に焦点を当てている（No.41, No.48）。

3. 時評

『前鋒』では、「宇宙光」と「小前鋒」という 2 つのコラムが設けられている。例外もあるが、「宇宙光」は台湾島外、「小前鋒」は台湾島内の情勢に対する時評的コラムとなっている。例えば、第 1 号の「宇宙光」では 1946 年のパリ条約締結の会議における、西側陣営と東側陣営のパワーゲームを諷刺している（No.5）。また、第 5 号や、第 18 号でも、東西に分断された世界に対する批判がみられる（No.27, No.123）。第 4 号では、アメリカ占領下で天皇の代わりにマッカーサーを「神

のように慕う」日本人について批判的に書くと同時に、女性参政権の獲得や労働組合の結成に民主化の進展を見出している（No.20）。

1947年以降の「宇宙光」は、中国大陸、または欧米諸国の台湾に関する記事をまとめている場合もある。中国大陸の情報は、上海で発行された雑誌と新聞が情報源となっている。その理由として、当時廖文奎が上海で教鞭を執っていたことが考えられる。

以上のような「宇宙光」に対し、「小前鋒」では台湾民衆の思いをすくい上げようとしている。第11号に掲載されている天雁「台湾の出路」は、玉皇大帝のお使いの者の口調で、島内にある「魑魅魍魎」を駆除する台湾人の加護を願う内容である（No.37）。「魑魅魍魎」は台湾における国民党政権の比喩と解釈できる。台湾の民間信仰と結びつく時評として、漢詩で政治家を批評する十八羅漢「台湾封神演義」（No.7, 15, 31, 95）、日本時代から国民党政権の統治までを批判する数え歌「新九日間の台湾民謡」（No.4）などもある。この民謡は「九更、願昇平日兮、談天説地」と、自由に語り合える平和な日への希求で終わっている。民主主義が民衆の参加を前提としているとすれば、これらの詩・歌はまさにそのような民主主義のあり方を端的に表現したものと言える。

4. 創作

創作については「世外民」による詩がある（No.51, 59）。「世外民」が誰かは不明であるが、垂水千恵によると、「世外民」の正体は楊逵あるいは呂赫若である可能性が高い。また、佐藤春夫「女誡扇綺譚」（『女性』1925.5）に登場する架空の台湾人詩人と同名である。「女誡扇綺譚」で植民者を代表する「私」と対比され、「世外民」は自らの土地の歴史にこだわる被支配者を象徴すると言われている[12]。また、第18号の最後にある東美「長篇小説 城春にして草木深し」は、戦時下の廖文毅の故郷である雲林を描いたものである。「東美」は廖の筆名であることから、廖自身の戦争経験に基づいた小説である可能性が高い（No.127）。

第2節　『前鋒』の支持基盤

それでは、『前鋒』を支えたのはどのような団体・個人であったのか。手がかりは読者からの投稿、前鋒雑誌社主催の憲法と自治をめぐる座談会や研究会、そして広告である。

読者からの投稿は多くはないが、第15号には吳日明・吳耀星「地方の声」がある（No.79）。台湾語調の文章で廖文毅の地元西螺の住民の廖への期待が示されている。

座談会・研究会としては、「第二次省都無力者座談会」（No.35）と「青年座談会」（No.64）、「自治法研究会」（No.78）の記録が収録されている。当時廖家の近くに住んでいた邱永漢によると、廖は本来なら国民党政権の「飼犬の役割をはたす資格があった」が、あえて無力者の味方となって「雑誌〔＝『前鋒』〕を使って政府から無視されている不平分子を集め、「省都無力者会議」と名付け定期的な座談会を開いていた」という[13]。「飼犬の役割をはたす資格があった」は、廖が行政長官公署鉱工省の簡任技監だったことを指すものと思われる。

「省都無力者会議」参加者の多くは、林茂生や陳紹馨のような学者、あるいは王添灯、王白淵、

蘇新、許乃昌、蕭友山、詹致遠（のち呉克泰に改名）などのジャーナリストである。1947 年 2 月 15 日には、前鋒雑誌社主催の「憲政検討講演会」で『民報』と『自由報』が後援として名を連ねている[14]。「青年座談会」は、1947 年 1 月 18 日に開催された若者を集めて憲法について討論した座談会である。「自治法研究会」は 1947 年 2 月に憲政における自治を研究するための集まりとして創設されたものである。ここでも廖文毅のほか、陳旺成、許乃昌、蕭友山、邱永漢、林順昌が中心となっている。座談会・研究会参加者の邱永漢や蕭友山、蘇新らは、後日、香港での「台湾再解放運動」でも重要な位置を占めることとなる[15]。

広告については、表 1 に記した。業種に着目して読み取ると、その分量が多いのは鉱工業（25 頁）、次いで出版関係（9 頁）であり、全体として鉱工業関係に偏っていたことがわかる。掲載広告中には旧日本資産の官営化に対抗する「大公企業公司」や「台湾信託公司」など「本省人（台湾人）」による民間企業の広告が見られる[16]。廖自身、この時期に「官僚資本主義」の打倒と「民族資本」の重視を呼びかけていた[17]。「民族資本」が廖の活動をバックアップしていた可能性がある。ただし、台湾電力や台湾水泥（＝セメント）のような国民党に接収された官営企業の広告もある。とりわけ裏表紙は台湾電力の広告である場合が多い。林蘭芳によれば、台湾電力は職員の現地採用の方針をとっており、当時責任者である孫運璿は台湾人技術者を高く評価していたため、台湾人を多く登用していた[18]。廖文毅が鉱工処に勤務していたこともあって、『前鋒』はこのような台湾人職員たちに支持されていたと推測できる。邱永漢が論じたように、外省人から経済の主導権を取り戻すためにも政治的自治が必要と意識されていたのであり、鉱工業にかかわる民族資本家層が『前鋒』の刊行を支援していたと推定できる。他方で、出版関係の広告には、王添灯、蕭友山ら左派台湾人による『青年自由報』の広告も含まれている。民主化と高度自治の確保を訴えた『前鋒』の論調は、民族資本家層と左派ジャーナリストの双方にとって支持可能なものだったと考えられる。

おわりに

廖文毅主編『前鋒』では、一方で世界の情勢に目を配り、他方で台湾民衆の歌などに着目しながら深く民主主義のあり方が問われ続けていた。また、国民党政権の統治を日本による植民地的構造の延長線上で批判的に捉える点でも一貫している。

これまでの先行研究では、廖における「反共」・「親米」という性格が強調されがちである。たしかに『前鋒』の誌面でもアメリカに関わる記事は多く収録されている。しかし、一方的なアメリカの礼賛ではなく、民主主義のモデルとしての敬意、科学研究を基盤とする国力への羨望と、人種差別や経済格差への戸惑いがない交ぜとなっている。また、米ソ冷戦構造への批判も顕著である。中華民国憲法制定にいたる過程で中国における「第三勢力」とも呼ばれる中国民主同盟が聯省自治を提起したことに関心を寄せるなど、東西対立の狭間で台湾の高度自治を実現する「第三の道」を模索していたことが、誌面構成にも表れている。

【謝辞】

本研究はJSPS科研費20J23404の助成を受けたものです。なお本資料紹介にあたっては、陳正茂氏に『前鋒』第18号を提供いただきました。ここに記して謝意を表します。

（注）

1　何義麟「「戰後初期台灣文學期刊史編纂」總論」戰後初期（1945 ～ 1949）台灣文學期刊目錄資料庫 http://dhtlj.nmtl.gov.tw/opencms/period/Period0002.html（最終閲覧：2020/10/13）。

2　廖文毅『台湾民本主義　フォモサニズム』台湾民報社、1957年、227頁。

3　張炎憲「《前鋒》雑誌創刊号」『台灣舊雑誌覆刻系列』4-2、呉三連史料基金会、1998年。

4　黄英哲『台湾文化再構築 1945 ～ 1947の光と影—魯迅思想受容の行方』創土社、1999年。何義麟「戦後初期台湾之雑誌創刊熱潮」『全国新書資訊月刊』第105号、2007年、18-22頁。

5　楊欽堯「二・二八事件前後廖文毅思想転変之研究」中興大学歴史学系博士学位論文、2013年。陳正茂「戦後台独運動先駆—廖文毅与「台湾再解放連盟」初探—」『台北城市大学学報』第35号、2012年。

6　「台湾省行政長官公署　三月来台湾工作概要」『民間私蔵国民時期　戦後台湾資料彙編（政治編）』第一冊、（台北）博揚文化事業、2011年、3-4頁。

7　廖文毅「競選有感」『台湾新生報』1946年8月24日付。

8　第1 ～ 5号は「大成老旧期刊全文数拠庫」（http://laokan.dachengdata.com/）、第11-15号は台湾中央研究院傅斯年図書館記念室、第16号は台湾中央研究院台湾史研究所所蔵、第17号は復刻版が『台湾史料研究』第50号、2017年に所載。第18号は陳正茂氏の提供。

9　「前鋒叢書編集部徴求論文啓事」『前鋒』第14号、1947年2月8日、18頁。

10　廖文奎の思想を分析したものとして、呉叡人「祖国的弁證—廖文奎（1905-1952）台湾民族主義思想初探」洪子偉『存在交渉—日治時期的台湾哲学』中央研究院・聯経出版公司、2016年がある。

11　「美国憲法怎様保証反対党的存在」『周報』第47号、1946年、14頁。

12　垂水千恵「糞 realism 論争之背景」—与《人民文庫》批判之関係為中心—」鄭烱明編『越浪前行的一代—葉石涛及其同時代作家文学国際学術検討会—』（高雄）春暉出版社、2002年、42-44頁。河野龍也「言語体験としての旅—佐藤春夫の「台湾もの」における「越境」—」『跨境 / 日本語文学研究』第3巻、2016年も参照。

13　邱永漢『わが青春の台湾　わが青春の香港』中央公論、1994年、90-91頁。

14　「憲政討論講演会　廖氏兄弟熱揮雄弁」『民報』1947年2月16日付。

15　拙稿「戦後における台湾「再解放」の試みと台湾史認識—蘇新『憤怒的台灣』（1949年）と廖文毅『台湾民本主義』（1957年）の歴史記述—」『教育史フォーラム』第14号、2019年も参照。

16　何義麟『台湾現代史—二・二八事件をめぐる歴史の再記憶—』平凡社、2014年も参照。

17　「参政員候補人政見発表廖文毅氏」『台湾新生報』1946年8月6日付。

18　林蘭芳「戦後初期資源委員会対台電之接収（1945 ～ 1952）—以技術与人材為中心—」『中央研究院近代史研究所集刊』第79号、2013、111-118頁。

表 1　第 2 期『前鋒』目次一覧

号数（発行地）発行年月日 頁数、定価、［広告］	著者	言語	【ジャンル】・表題（中文の場合は筆者による試訳）	No.
第1号（台北）　1946/10/12		中・日	【社論】台湾人に生れて	1
25頁、6元（奥付、裏表紙の欠落）	廖文奎	中・日	心理改造論	2
［広告］	黄瑞卿	中	民族工業のための呼びかけ	3
第一織物工廠1		中	新九日間の台湾民謡	4
台湾英文雑誌社1/2		中	【宇宙光】〔パリ条約への批評/アメリカ製飛行機の紹介〕	5
大承出版社3/4	王良清	中	【小前鋒】秋の訪れ	6
台北市煤気1/2	十八羅漢	中	台湾封神演義	7
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色〔廖文毅のアメリカ経験、連載〕	8
第2号（台北）1946/10/19		中・日	【社論】「民選」か「官選」か「銀選」か	9
29頁、6元（奥付、裏表紙の欠落）	洪深	中・日	米国憲法は如何にして反対党の存在を保証してゐるか	10
［広告］		中	【宇宙光】アメリカの公民の自由	11
美東1/4	廖文毅	中	台湾鉄鋼業の将来	12
李仲義商行1/2		中	【小前鋒】双十節集団結婚/公務員の俸給調整/中国と海外の家屋占領運動/区長選挙	13
広合（元広合洋行）1/2	張生	中	アメリカKKK党	14
大同汽車1/2	十八羅漢	中	台湾封神演義	15
	偉堅	中	人生	16
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（二）	17
第3号（所蔵不詳）				
第4号（台北）1946/11/2		中・日	【社論】中国の出路	18
28頁、6元（奥付、裏表紙の欠落）	邱賛生著/黄瑞卿訳	中・日	燐酸塩皮膜防銹法ニ就イテ	19
［広告］		中	【宇宙光】「飛び石」戦略〔アメリカ占領下の日本〕	20
広合（元広合洋行）1/2	張生	中	アメリカKKK党（三）	21
	五柳生	中	【小前鋒】前鋒受話器	22
		中	【小前鋒】台湾の区郷鎮長選挙についての世間話	23
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（四）	24
第5号（台北）1946/11/9		中・日	【社論】官党の大勝利を祝す！	25
25頁、6元（奥付、裏表紙の欠落）	廖文奎	中	与野党選挙戦	26
［広告］		中	【宇宙光】米ソ戦争への予想	27
姜琦著『三民主義哲学』1/2		中	議員選の中　アメリカ国会を紹介	28
姜琦著『教育学新論』1/2		中	応援要請書〔ボルネオ島台湾籍旧日本兵の釈放を要請〕	29
大承企業1/4	怪人快語生	中	【小前鋒】アホな選挙代表〔獣婊〕への感想	30
	十八羅漢	中	台湾封神演義	31
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（五）	32
第6～10号（所蔵不詳）				
第11号（台北）1947/1/1		中	【社論】新人、新生、そして新年	33
33頁、8元	羅隆基	中	憲法草案の批評〔金陵大学での羅隆基の講演〕	34
［広告］	前鋒編集部	中	第二次省都無力者座談会	35
台湾水泥1/2 台北市煤気1/2 台湾鋼鉄機械1 専売局1 貿易局1 工商銀行籌備処・彰化商業銀行籌備処・華南商業銀行籌備処・台湾信託股份公司1/2 大承企業1 双帆魚肝油1/2 台湾茶行1/2 台湾省土木建築工業合同業公会連合会1/2 新中華大酒家1/2 台湾印刷紙業1 台北県農会・台北県合作社連合会1/2 台湾窯業1 台湾電力1		中	【宇宙光】張群が行政院長に出世した謎	36
	天雁	中	【小前鋒】台湾の出路	37
	廖煥彰	中	【文芸】延平郡王祠を参拝	38
	嘉珍	日	【文芸】黒子	39
		日	【文芸】龍眼の実	40
	鶏籠生	中	自由の港〔イギリス統治下の香港の自由と不自由〕	41
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（十一）	42
第12号（台北）1947/1/9		中	【社論】「先覚」が「後覚」に、「後覚」が「先覚」に！	43
33頁、8元	邱炳南	中	【論文】台湾経済の現状を論じる	44
［広告］		日	【論文】貨幣問題の再認識	45
大承企業9/10 長楽酒館1/10 ゴム各種9/10 明星西餐庁1/4 台湾水泥1/4 桃園汽車客運1/4 大承企業1/2 五星飯館1/2 台湾紙業1　大公企業1 台湾電力有限公司1		中	【宇宙光】上海が語る台湾	46
		日	【小前鋒】結婚三重奏〔台北の集団結婚式〕	47
	鶏籠生	中	【文芸】上海へ〔上海旅行で見た租界内外の格差〕	48
	L・S・H	日	【文芸】舞踏会評―蔡瑞月女士「創作」舞踊会	49
	阿Q之弟	中	狂物春色（一）〔鶏籠生との台湾旅行記、連載〕	50
	世外民	日	かの丘	51
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（十二）	52
第13号（台北）1947/1/16		中	【社論】憲法公布後の台湾	53
32頁、8元	湯中	中	【論文】台湾統治についての管見	54
［広告］	邱炳南	中	【論文】貨幣安定協会	55
台湾水泥1/4 明星西餐庁1/4 大承出版社1/2 台湾橡膠1/2 五星飯館1/2 大華旅社1 瑞三煤鉱1 台湾紙業1 台湾製碱1 台湾電力1		中	【宇宙光】上海が語る台湾	56
		中	【論文】第二次世界大戦中アメリカの軍備（一）	57
	阿Q之弟	中	【文芸】狂物春色（二）	58
	世外民	日	【文芸】胡人の教書	59
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（十三）	60

第14号（台北）1947/2/8 33頁、8元 ［広告］ 台湾製碱1 台湾玉琛林琺瑯證章製造所1 台湾橡膠1 台湾新生油墨工廠1/4 大承企業9/10 長楽酒館1/3 台湾英文雑誌社1/3 週刊青年自由報1/4 台湾玻璃工業1/2 大承出版社1/2 大中華旅社1 聯栄行1 台湾電力1		中	【社論】誰が「台湾には人材がない」というのか？	61
	邱炳南	日	【論文】台湾財政の基本問題	62
	編輯生	中	廖文奎博士近著『人生哲學の研究』の抜き書き	63
	前鋒編輯部	中	青年座談会	64
		中	【宇宙光】政学系を透視する	65
		中	【宇宙光】〔第二次世界大戦中〕アメリカの軍備（二）	66
		中	【小前鋒】台湾糖業の近況	67
	阿Q之弟	中	【文芸】西螺の友人を訪問　狂物春色（三）	68
	ローマ詩	日	ケンブリッジ歌謡より	69
	樂狂生	日	青年と音楽の重要性	70
	〔廖〕文毅	中	アメリカの景色（十四）	71
第15号（台北）1947/2/21 33頁、8元 ［広告］ 大承企業1 水吉営造廠1/2 小春園菜社1/2 台北中央水産物1/3 福建泉州白雲子推命演課1/4 大通行1/4 台湾橡膠1 台湾電力1		中	【社論】マーシャルの国務長官就任とアメリカの外交政策	72
	廖文奎著/廖史豪訳	日	【論文】台湾に於ける帝国主義と民族主義との闘争	73
		中	【宇宙光】外国記者が語る台湾	74
	靖雨	中	【宇宙光】台湾の醜聞の連続〔選挙不正、本省人差別〕	75
		中	【宇宙光】マーシャル帰国の一部始終	76
		中	【宇宙光】第二次世界大戦中アメリカの軍備（三）	77
		中	【小前鋒】「自治法研究会」の成立	78
	吳日明・吳耀星	中	【小前鋒】地方の声	79
	廖文毅	中	戦後盧山登山の記（一）	80
		日	【文芸】断想−理解といふこと	81
	世外民	日	【文芸】葉に託す	82
	〔廖文毅〕	中	アメリカの景色（十五）	83
第16号（上海）1947/4/20 「凄惨な二二八事件特集号」 35頁、法幣2千元 （奥付、裏表紙の欠落） ［広告］ 上海外科医院1		中	【社論】祖国の為に汗を流し、涙を揮いながら台湾を話す	84
	廖文奎	中	【論文】凄惨な二・二八に関する呼びかけ	85
	廖文毅	中	【論文】台湾鉱工政策改革の提案	86
	鄭成功	中	秋望（七官律）	87
	螺陽居士	中	二・二八に哀しむ	88
	自由を失った一書生	中	【宇宙光】台湾人が語る台湾	89
		中	【宇宙光】台湾人在上海団体の台湾事件に関する報告書	90
		中	【宇宙光】本国の人が語る台湾	91
		中	【宇宙光】外国人が語る台湾	92
	〔廖〕文毅	中	【文芸】戦後盧山登山の記（二）	93
		中	編者の言葉	94
		中	【小前鋒】台湾封神演義	95
第17号（上海）1947/8/22 24頁＋α、法幣2千元 （奥付、裏表紙の欠落） ［広告］ 上海外科医院1 奥付、裏表紙の欠落		中	【社論】覆車の戒め	96
	廖文毅	中	【論文】中国の危機	97
	王麗明	中	【論文】助けを求めるか自ら助けるか	98
		中	【宇宙光】台湾事件善後処置及び台湾省改革に関する意見書	99
		中	【宇宙光】在上海台湾人6団体の台湾省政府改組に関する声明	100
		中	【宇宙光】「二・二八」事件の責任所在と虐殺の真相調査、及び地方自治実施の前倒しを求めるための説明書	101
		中	【宇宙光】敗戦国日本が平和会議で抱いている野望	102
	丁卯	中	【宇宙光】いわゆる「二・二八事件の首犯」	103
	邱念台	中	【宇宙光】廖兄弟に帰台を呼びかける手紙	104
	廖文奎	中	【宇宙光】邱念台氏へのお礼の手紙	105
	梁秋水	中	【文芸】台湾人民を哀しむ	106
	螺陽居士	中	【文芸】三不主義の行政長官へのインタビュー—対話劇	107
	廖東美	中	【文芸】盧山の賦	108
	紫霞道人	中	【文芸】白鹿洞霊	109
	李太白	中	【文芸】老五峰を吟ずる	110
	白香山	中	【文芸】花徑を吟ずる	111
	李太白	中	【文芸】盧山の瀑布を吟ずる	112
	廖東美	中	【文芸】盧山を再び巡る	113
	林爾嘉	中	【文芸】黄龍潭を吟ずる	114
	有情	中	【文芸】男たらし	115
第18号（香港）1948/6/30 「城春にして草木深し」 頁数、価格不詳 （広告頁や奥付、裏表紙の欠落） ［広告］ 不詳		中	【社論】進むだけの価値がある一筋の道	116
	林憂龍	中	【論文】マーシャル・プランと金塊戦線	117
	方正	中	台湾の内幕　鈕先銘の謬論に反論	118
		中	時事雑談	119
	台風	中	「待てばいい！二・二八はまた来る」−このスローガンで力を集めて革命のクライマックスを迎えよう−	120
	〔林〕憂龍訳	中	【宇宙光】二つの中国	121
		中	【宇宙光】ある民主の茶番〔蔣介石の総統就任を批判〕	122
		中	【宇宙光】ヘンリー・A・ウォレスの運動〔アメリカの第三勢力運動〕	123
		中	【小前鋒】台湾人が語る台湾	124
		中	【小前鋒】「全国運動会」特報〔上海の「全国運動会」〕	125
	台湾高山同盟著/林憂龍訳	中	【小前鋒】拝啓台湾同胞〔台湾先住民族団体の声明〕	126
	東美	中	【文芸】長篇小説 城春にして草木深し〔戦時期の雲林〕	127

注
1) 筆者作成。日文表題があるものについてはそのままとし、中文表題のみのものは筆者による試訳で示した。
2) 広告主名から「有限公司」など企業であることをあらわす表現を削除した。

（2020 年 10 月 15 日投稿受理、2021 年 2 月 20 日採用決定）